

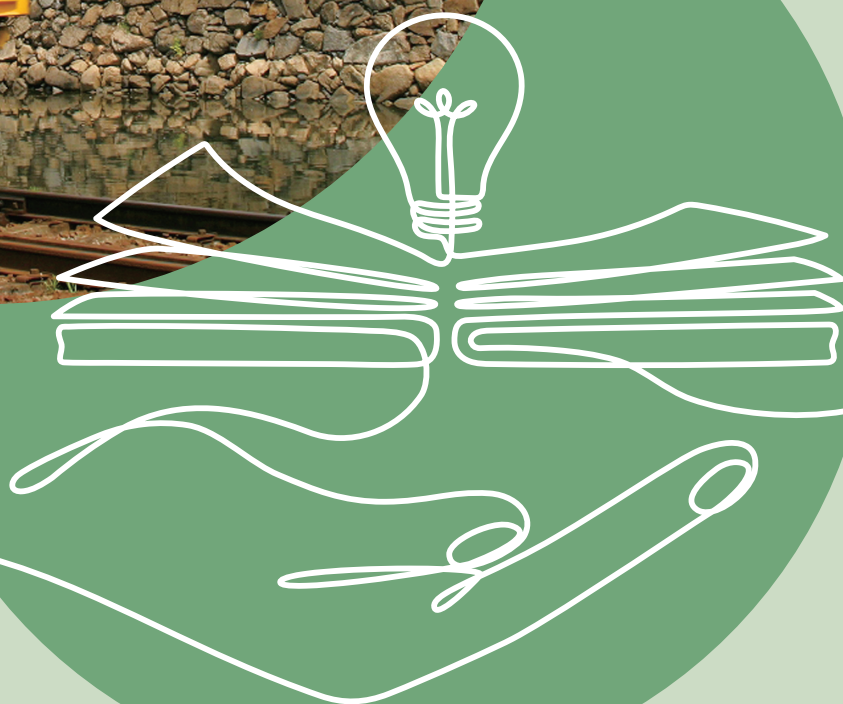
特集
香川県

全国初の全県的な
医療情報連携
— かがわ医療情報
ネットワークK-MIX R

域・活 連携

いき・いき れんけい

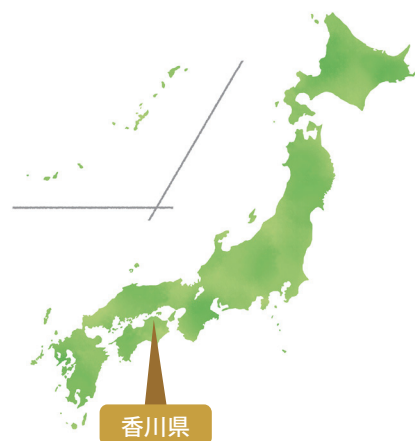
2025年12月発行
香川県



全国初の全県的な医療情報連携 — かがわ医療情報ネットワークK-MIX R

香川県は2003年に県内全域を対象とした遠隔医療ネットワークK-MIXの運用を開始以来、全国に先駆けてITを活用した医療情報連携ネットワークを構築してきた。2021年に、それまでのネットワークをリニューアルして、かがわ医療情報ネットワークK-MIX Rの運用を開始した。香川県の医療情報連携ネットワークの取り組みについて、ネットワーク構築に携わってきた先生方にお話を伺った。

〔取材日：2025年 9月 17日〕 ＊記事内容、所属等は取材当時のものです。



(左から)
高口 浩一先生
香川県立中央病院 院長
濱本 勲先生
香川県医師会 常任理事・医療法人社団そごうクリニック 院長
横井 英人先生
香川大学医学部附属病院 医療情報部 教授

医療連携にITを活用した 仕組みを構築

香川県は、全国に先駆けて医療連携にITを活用する仕組みづくりに取り組んできた。2003年には、香川大学医学部、香川県、香川県医師会により開発された遠隔医療ネットワークK-MIX（以下、K-MIX）の運用を開始した。香川県立中央病院 院長の高口浩一先生は、「K-MIXは、遠隔読影支援と加入医療機関同士での医療情報システムです。遠隔読影支援は、例えば、遠隔地の診療所から支援病院へ画像データを送ることで、専門医の読影支援を受けられ、診療所から大学病院へ患者さんを紹介した際に、

画像データを患者さんにDVDで持たせることなく迅速に送ることができる仕組みです。医療情報システムは、加入医療機関同士であれば文書と共にさまざまな形式のファイルを安全に送ることができる仕組みで、患者紹介、地域連携クリティカルパスなどを迅速に共有できます」と語る。

香川県医師会 常任理事で医療法人社団そごうクリニック 院長の濱本 勲先生は、「K-MIXの運用当初は画像電子データを院外に出すことに抵抗のある病院が多数でしたが、そのメリットを根気強く説得して進めてきたと聞いています。今では当たり前になっている遠隔読影支援ですが、当時としては先進的な取り組みでした」と振り返る。

2014年にはK-MIXとは別に、医療機関情報システムK-MIX+の運用を香川県が開始し、安全に香川県の中核病院間の医療情報共有と中核病院からその他の医療機関への医療情報提供を行うことができるようになった。

濱本先生は、「中核病院の患者データを市中の診療所等が参照できるようになったことは画期的でした」と語る。

新たな時代の

IT医療情報連携ネットワーク、K-MIX R

2021年には、これまでのネットワークシステムがさらに進化したかがわ医療情報ネットワークK-MIX R（以下、K-MIX R）が始動した。濱本先生は、「県医師会が運営するK-MIX、県が運営するK-MIX+、これらのシステムを統合し、かつ中核病院以外の医療機関の患者データも共有可能とすることで、新しくK-MIX R (Reborn)として歩み始めました」と話す。さらにK-MIX Rには、新たに国内初のレセプト情報活用システムBASIC（以下、BASIC）も追加された。専用端末にK-MIX R BASICカードをかざすだけで、複数の医療機関で診断された医療情報を見ることができる仕組みだ。香川大学医学部附属病院 医療情報部 教授の横井 英人先生は、「2025年10月からマイナ保険証を利用したマイナ救急が開始されましたが、香川県では10年前からすでにK-MIX+上で行ってきました。似たようなシステムですが、K-MIX Rは病名や検査結果等も分かるので、香川県では併行して使っていく予定です」と話す。

K-MIX Rは、これら複数のシステムで構築され、参加施設は同意書を得られた患者さんの医療データを、インターネットのポータルサイトからシステムにアクセスして、医療機関同士で共有することができる。

K-MIX Rの具体的な活用事例

K-MIX Rを使うことで、医療はどのように変わるのだろうか。濱本先生は、「例えば、薬剤師さんは、これまで病名も分からないまま、処方箋を基に薬の説明をしてきましたが、K-MIX Rを利用すれば、病名や医師の診断過程、血液検査のデータなどが見られるので、安全性の高い服薬管理が可能となります」と語る。

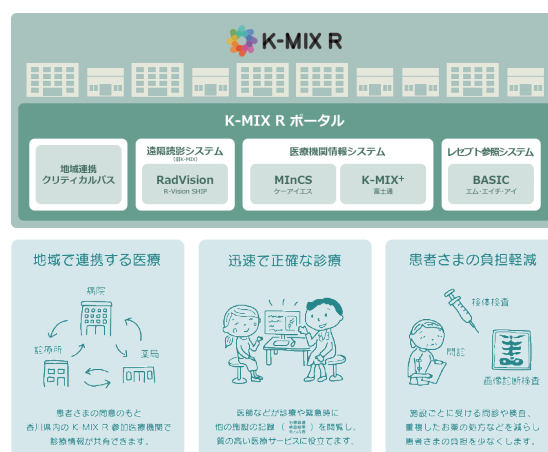
高口先生は、「当院の総合診療科には、紹介されていらした初診の患者さんも多いのですが、同意書を書いていただければ、他の病院で行った血液検査や画像検査の結果を1時間くらいでインターネット



高口 浩一先生
香川県立中央病院 院長

を通じて確認できます。そのため診療時間が短縮され、診断に早く至ることができます。患者さんにとっても検査の重複が避けられて医療費の節約にもなり、さらにCT検査などの被ばくも最小限に抑えることができ、非常に有用です」と話す。

■ 全国初のITによる全県的な医療連携 かがわ医療情報ネットワーク「K-MIX R」ポータル画面



【出典】かがわ医療情報ネットワーク協議会ホームページより
(<https://kmix-r.jp/about/>) 閲覧日：2025年11月1日

濱本先生はさらに、市中の診療所のメリットとして、「患者さんをかかりつけ医から大学病院へ紹介する場合、同意書を書いてもらえば、大学病院で入院治療を受けて退院後にまたかかりつけ医を受診するときに、それまで患者さんが受けた治療の経緯がK-MIX Rを通じて知ることができます。大学病院の先生にとっても診療情報提供書を書く手間がずいぶん減ると思います。また、中には主治医の返書が届く前に患者さんが来てしまうこともあります。K-MIX Rを見れば経過が分かるので医師も患者さんも安心です」と語る。

一方、横井先生は、「K-MIX Rのデータは、さまざまな研究に活用することもできます。患者さんに研究



横井 英人先生
香川大学医学部附属病院
医療情報部 教授

のためにデータを見せてくださいと同意が取れば、各病院に出向かなくても研究用のデータを見せいただくことができるので、広範囲で病院のデータを集めることができ、大規模研究や治験などに活用できます」と語る。

K-MIX Rの課題と展望

今後の展望として濱本先生は、「経済的自立を実現させることを目指しています。現状として通常のランニングコストは概ね賄えますが、病院のゲートウェイサーバーの更新等、維持に費用がかかるものもあります。今は県からの補助金等で賄っていますが、本来は会費で運営費を賄いたい。そのためには加入施設をもっと増やせるよう、K-MIX Rの利便性について理

解を広めたいと思います」と述べる。さらに、新しく高度医療機器の共同利用システムの開発も進めており、「高度医療機器のMRIやCTの台数は多いものの、偏在化が激しく、大学病院等では常に検査待ちですが、中小規模の病院



濱本 勲先生
香川県医師会 常任理事・医療
法人社団そごうクリニック
院長

では1日1件も撮影しないところもあります。これを解消する仕組みとしてK-MIX Rを利用した共同利用システムを開発できればと考えています」と続ける。

こうした医療情報連携ネットワークの構築には県行政の協力は欠かせない。香川県は、「K-MIX Rの立ち上げ以降、徐々に参加医療機関数が増えてきて、会費収入で概ねの運用費は賄えるようになってきました。しかしながら、新たなシステム開発のイニシャルコスト等は会費収入だけでは難しいのが実情で、そのような取り組みに対しては、県がこれまで支援をさせていただきました。また、診療所等が新たに参加するハードルを下げるために、ネットワークへの参加に必要な設備整備の補助を行うなど、県としても参加医療機関の拡大に努めているところです。」と述べる。それに対し、濱本先生は、「予算の確保はもちろんですが、県には、毎週行っているベンダーとの打ち合わせや、各地域の医師会に出向いて説明会をする際にも参加してもらい非常に助かっています。こうした取り組みは県行政が同じ熱量でないと続けられません。香川県はその点でも県の協力があって続けてこられたと思います」と語る。

こうした香川県の取り組みがモデルケースとなり、全国へ広がることが期待される。